

不況と戦争の時代（1931～1945） 外伝

《多摩川治水記念碑の文字を書いた辰馬鎌蔵とは？》

辰馬鎌蔵（注1）は、1918年（大正7）に設置された内務省多摩川改良事務所（現国土交通省京浜河川事務所）の初代所長です。多摩川治水記念碑の文字を書いたのは、東京土木出張所長（現関東地方整備局長）のときであり。その後、退官した青山士（注2）を引き継ぎ内務技監となっています。

多摩川治水記念碑の裏面には、功労者として川崎河港水門を築造した金森誠之（注3）の名前もあります。

さて、1936年（昭和11）、内務省土木局を揺るがす大事件が起ります。発端は、土木局長に昇進した文系の岡田文秀（注4）が、新設された土木局第三技術課長に、砂防の赤木正雄（注5）を指名したことです。

当時、土木局は、道路行政を強力に促進すべく、局長の直属として、道路改良係が設置されていました。不況対策として遂行された時局匡救事業でも、道路整備が中心的に行われ、新しい技術課が誕生した場合には、土木系技師がなると思われていたことから、この岡田の人事に、土木系技師の幹部たちが反発し、辞職願を内務技監青山に提出します。

青山は、道路改良係の三浦七郎（注6）を下関土木出張所長に昇任させ、自らは内務技監を退くことで、事態を納めます。そして辰馬が、内務技監になります。このとき、金森も仙台出張所長に昇任しています。

辰馬は、ギクシャクした内務技師たちを再びまとめあげて、国内のインフラ整備を期していたことでしょう。しかし、中国において、北支事変（日中戦争）が勃発し、そして黄河の堤防破壊という大惨事が引き起こされます。

こうした事態に、辰馬は、満州国、華北を視察します。そして陸軍の要請を受け、下関土木出張所長だった三浦を、北支那臨時政府の建設総署の初代技監に送り出します。また、政府に興亜院が創設されたときには、内務省技師兼東京帝国大学教授の宮本武之輔（注7）を技師部長に送り出しました。（注8）

残念ながら、三浦、宮本両名とも、過労で死去し終戦を迎えることはできませんでした。

なお、当時の記録は断片的にしか残されていません。とりわけ内務省は、占領軍がやってくる目に文章を焼却してしまいましたから、なおさらです。従って、記述には気を付けましたが、憶測にならざるを得ないところがあり、さらなる研究に期待しているところです。

注1：辰馬鎌蔵（生没年：1882－1959年）は、京都帝国大学卒業後、内務省に入り、淀川、遠賀川、利根川、多摩川と改修工事に従事し、名古屋土木出張所長（現中部地方整備局長）、東京土木出張所長（現巻頭地方整備局長）を経て、1936年（昭和11）、内務技監になります。1939年（昭和14）退官。

注2：青山士（あきら、生没年：1878－1963年）は、東京帝国大学卒業後、パナマ運河の工事に重視し、帰国後内務省に奉職し、荒川放水路工事を完成させ、その後新潟土木出張所長として、大河津分水の可動堰修築を、現場の宮本武之輔と一緒にやり遂げ、内務技監に昇進しました。大河津分水の分流地点には、「信濃川補修工事竣工記念碑」（1931年（昭和6）建立）があり、そこに青山は、「萬象ニ天意ヲ覺ル者ハ幸ナリ」の言葉を刻んでいます。

注3：金森誠之（しげゆき、生没年：1892－1959年）は、水土の豆知識225《金森誠之と、河港水門》を参照してください。

注4：岡田文秀（生没年：1892－1989年）は、土木局河川課長のあと、千葉県知事を経て、内務省衛生局長、土木局長を歴任。その後長崎県知事、厚生次官を経て退官。戦後は、公職追放となりました。

注5：赤木正雄（生没年：1887－1972年）は、砂防の礎を築きました。第三技術課長だった1938年（昭和13）に阪神大水害が発生し、復旧のため六甲山砂防工事を指揮しました。戦後は、国会議員となり、砂防会館の建設に尽力しました。

注6：三浦七郎（生没年：1889－1945年）は、1937年（昭和12）土木局道路改良係長から下関出張所長になります。道路改良係主任技師のとき、関門海峡につり橋を架けようとしませんが、陸軍から反対されてトンネル案に転じ、調査費を獲得してパイロットトンネルを開通させています。出張所長のあと、1938年（昭和13）に北支那臨時政府の建設総署の初代技監となり、企画院技術部長、大東亜省参事官に登用されていきます。終戦の5ヶ月前、過労のため北京で逝去。57歳でした。

注7：宮本武之輔（たけのすけ、生没年：1892－1941年）は、1938年（昭和13）に設立された興亜院の技師部長となり、その後、企画院の次長まで出世しますが、1941年（昭和16）に過労で死去。51歳でした。企画院次長のとき、いわゆる科学技術基本計画を閣議決定しています。水土の豆知識104《土木技術者宮本武之輔が造った科学技術行政の芽》を参照してください。

注8：柳条溝事件のあと、満州国へ技術者が渡りますが、その人事に内務省が積極的に関与

した形跡はありません。盧溝橋事件以降の技術者派遣に関しては、内務省が主体的に関与したと推察します。辰馬が、満州国、華北を調査したとき、前々内務技監や東京土木出張所長も同行しており、辰馬だけの独断専行で人事を行なったとは思えません。宮本武之輔も同行していますが、前内務技監の青山士は、同行していません。

写真は、①多摩川治水記念碑（細見撮影）、②辰馬鎌蔵（第四十四巻 第六号 昭和34年6月発行掲載写真）、③三浦七郎（工事画報 昭和13年7月号発効掲載写真）、④宮本武之輔（土木図書館、宮本武之輔アーカイブ掲載写真）、⑤金森誠之（土木学会誌 第四十四巻第九号 昭和34年9月発行掲載写真）

写真は、①多摩川治水記念碑（細見撮影）、②辰馬鎌蔵（第四十四巻 第六号 昭和34年6月発行掲載写真）、③三浦七郎（工事画報 昭和13年7月号発効掲載写真）、④宮本武之輔（土木図書館、宮本武之輔アーカイブ掲載写真）、⑤金森誠之（土木学会誌 第四十四巻第九号 昭和34年9月発行掲載写真）

①



②



③



④



⑤

